

Sample

お点前の研究—茶の湯 44 流派の比較と分析—
目次

序章 点前の研究の考え方 1

- 1 研究の前史—千利休の点前を求めて— 1
- 2 「茶の湯点前比較研究試論」の概要とその後の展開 3
- 3 流派による点前のちがいと変化 8
- 4 本書の構成 12

第1章 調査対象流派および点前の分析方法 15

- 1 調査対象流派とその概要 15
- 2 点前の分析方法 19

第2章 多変量解析による分析 27

- 1 多変量解析による 44 流派の分析 27
- 2 44 流派のグラフ化による検討 28

第3章 文化系統学による分析 35

- 1 現在から過去を推定する学問 35
- 2 文化系統学による 44 流派の分析 38

第4章 調査対象項目ごとの検討 43

- 1 項目ごとの検討方法 43
- 2 点前全般についての項目 (①~⑨) 44
- 3 点前手順を細分化した項目 (1~33) 64

第5章 点前の多様性をめぐる言説 113

- 1 『茶譜』および『茶道望月集』にみる点前の議論 113
- 2 【⑤】茶碗の仕込み方について 115
- 3 【②】帛紗の付け方について 118
- 4 【8】釜の蓋を開けるについて 123
- 5 【7】柄杓を構える (合の向き) について 126
- 6 茶書の記述と現在の状況との比較検討 130

終章 点前が変化すること 133

- 1 本書の議論のまとめ 133
- 2 点前が変化した方向性をめぐる仮説 134
- 3 点前の変化についての再考 137
- 4 点前の変化と家元の役割 139
- 5 さいごに 141

■資料編

資料1 調査対象流派の系譜 145

- 1 点前からみた流派の問題 145
- 2 Aグループ・千家系IおよびBグループ・千家系II 146
- 3 Cグループ・有楽系 160
- 4 Dグループ・南坊系 164
- 5 Eグループ・その他 166
- 6 Fグループ・石州系 171
- 7 Gグループ・三斎系 183
- 8 Hグループ・遠州系 186

資料2 44 流派の点前の調査方法 189

資料3 類型化における判断 193

資料4 参考文献等 198

あとがき 205

索引 210

Sample

序章 点前の研究の考え方

1 研究の前史—千利休の点前を求めて—

(1) はじめに

本書は、いわゆる“お点前”、すなわち茶の湯の点前に関する研究である。茶の湯には流派がある。流派により点前のどこがどのようにちがうのだろうか。また、点前のちがいから流派相互の関係はどのように考えられるのであろうか。本書では、現在おこなわれている44流派の点前を調査し、若干の分析をくわえた結果をまとめることとする。

茶の湯の流派といえば、表千家流と裏千家流とを思いうかべる人が多いだろう。茶の湯を学ぶ人の約1/2が裏千家流に属し、残りの半分の約1/4が表千家流、さらにその残りの約1/4の人々がさまざまな流派に属している。本書において直接間接に点前を調査した流派は68流派におよんでいる。裏千家流、表千家流を別格として、それ以外にも全国的に広まっている大流派があり、一方には特定の地域にのみ伝わる小流派がある。

研究内容を構想していた段階では、点前のちがいがうまれてきた経緯を追究し、千利休の点前を復元できないかという思いをいだいていた。しかし、研究をすすめていくなかで、それはたいへんにむつかしい問題であることを悟らざるを得なかった。結局、本書は、現在の流派間における点前の多様性を示すことを主要な目的とし、その状況にいたる変化について推測するところみを取りまとめた内容となっている。

茶の湯点前の研究書として本書を手にした方は、表やグラフを多用する本書の内容に、とまどいを感じられることであろう。私がそもそも流派による点前のちがいに気付いた経緯、および点前のちがいについて模索しながら研究をすすめてきた過程をまずのべておく。このことは、本書のうまれた背景を説明することとなるだろう。

(2) 流派による点前のちがいの発見

私が茶の湯をはじめたのは、昭和55年(1980)の大学入学時のことである。同じく茶の湯をするならば、人と異なる流派を学んでみたいと考えた。そこで石州流の一派である鎮信流の家元松浦素(祥月)先生に教授者の紹介を依頼する旨の手紙をさしあげた。その返事には自宅の稽古にくるようにとあった。統計学者として上野学園大学教授でもあった松浦先生のもと、私は茶の湯の指導をうけることとなり、毎月3回の稽古を待ち遠しく思いながらかよったものである。

かと思ったのである。ただし、結論を先にのべておくならば、残念ながら話はそれほど単純ではなかった。のちに千利休の教えをそのまま伝えているとされる肥後古流を調査したところ、その柄杓の構え方は、表千家流とも、鎮信流や藪内流とも異なるものであった。これには当惑した。私は自分の思い付きについて本を調べたり、人にたずねたりしていたが、納得の得られないままに歳月が流れたのである。

この状況が大きく変化するきっかけは、平成7年（1995）1月の阪神・淡路大震災にある。兵庫県西宮市にある拙宅は、倒壊こそしなかったものの、大きくかたむき、みるも無残な姿となった。形あるものが失われ、人の命がはかないことをまさに実感したとき、私がこの世に存在した証を残したいと思うにいたった。それは1冊の本を書くことである。私がいっていた茶の湯についての疑問を調べて本にしたいと考えたのである。

そう決心するとすぐに行動を開始した。まずは各流派の点前の情報をあつめることである。流派の点前の教本をさがす一方、平成8年（1996）5月頃からいくつかの流派関係者を訪問して点前を調査した。そして、平成9年（1997）2月に沖縄県那覇市で開催された茶の湯文化学会研究会において、「茶の湯点前比較研究の試み」と題して口頭発表をおこなうにいたった。震災から2年後のことである。この内容をまとめた論文が「茶の湯点前比較研究試論」である。

2 「茶の湯点前比較研究試論」の概要とその後の展開

(1) 点前のちがいの分析方法

「茶の湯点前比較研究試論」（以下「試論」という）の概要を説明しておく。試論の検討方法は、より精緻にして本書においても踏襲している。一般に茶の湯の実技を知る人は、他流派の点前のちがいに敏感に反応する傾向がある。あやまりがないように点前することをつねに稽古しているため、他流派における点前のささやかなちがいに対しても、それをあやまりと感じてしまう。このため他流派の点前がひじょうに異なるように思えるのである。流派により点前がどの程度異なり、どの程度同じであるのか。このことを客観的に評価することは、点前の研究の第一歩となる。

点前とは、抹茶を点てる手順のことであり、特徴ある所作により構成されている。点前を細分化してそれぞれ検討するならば、適切な評価ができるのではないかと考えた。具体的には、本勝手風炉薄茶運び点前（以下「本勝手」を略す）を調査対象として、その一連の手順・所作を39項目に分割し、類型化を検討した。ただし、7項目についてはちがいがあまりみられないため、さしひき32項目について、それぞれ複数の類型を設定した。この結果、各流派の点前は、32個の記号のコードとしてあらわされることとなる。この

ところが、翌昭和56年（1981）1月に松浦先生が急逝され、しばらく稽古が休止することとなった。点前が面白く、新鮮な気持ちで学んでいた時期に稽古が中断したことは、ひじょうにつらいことであった。しばらくして松浦先生の実妹にあたる正親町舒子先生に師事して稽古を再開することができた。一方、昭和56年4月から大学茶道部に入部し、表千家流を学ぶこととした。

このとき松浦先生から教えをうけられなくなったことは、茶の湯を研究している現在の私につながっているといえる。第一に、茶の湯について何か疑問を感じると、先生ならばどのように答えられるだろうかと自問する習慣が身に付いたことである。同じ流派とはいえ、正親町先生の所作には松浦先生のもので目にしていたことと微妙なちがいを感じた。鎮信流にもその教えに多少の変化があり、その痕跡がみられたのである。点前とは短期間であっても変化するものであると認識することとなった。

第二に、表千家流を少し学んだことである。2つの流派を同時に稽古するとき、頭と体とはどのように働いているものであろうか。点前のゆっくりとした動きならば、つぎの所作を考えながら点前をすすめることができる。基本が鎮信流である私の場合、表千家流では、つぎの所作のここがちがうと考えながら点前をしていた。

このような経験をすれば、点前のちがいに敏感となるのは当然のことであろう。のちに明らかにするとおり、鎮信流と表千家流とのちがいはひじょうに大きい。単に所作がちがうというだけではなく、その背後にある考え方にちがいがあるように思えた。茶の湯についての考え方、本書ではそれを“茶の湯観”とよぶこととするが、茶の湯観のちがいが点前のちがいとして表現されているのではないかと考えた。

とくに確たる根拠があつてのことではないが、このころから千利休の点前は、表千家流よりも鎮信流に近いのではないかという印象をもっていた。実際に点前をしてみて、何となく表千家流の点前は“左利きの点前”という違和感をおぼえたのである。18世紀前半の文献『槐記』に千宗旦が左利きであったと記されていることをのちに知ることとなる。ただし、このことにはもう少し異なる意味があると現在では考えている。

(3) 点前の比較研究への着手

大学卒業後は東京をはなれたため、継続的に茶の湯の稽古をすることはなくなった。ただし、茶の湯への関心はつづいていた。あるとき、藪内流の教本を目にして大におどろいた。柄杓の構え方が鎮信流とほとんど同じなのである。藪内流は、千利休の兄弟弟子である藪内剣仲を流祖とし、“古儀茶道”を称するように昔の点前を伝えているという。鎮信流は、千利休の長男千道安の孫弟子にあたる片桐石州により開かれた石州流から分岐している。すなわち藪内流と鎮信流とは千利休にまでさかのぼらなければ接点はない。ではなぜ柄杓の構え方が同じなのか。その構え方が千利休以来のものではないかと考えたのである。そして、いくつかの流派を調査するならば、千利休の点前を復元できるのではない

とき念頭にあったのは遺伝子の塩基配列のイメージである。点前をコード化するならば、いわば流派の DNA を明らかにできるのではないか。DNA がわかるならば、過去をさぐることもできるのではないかと思ったのである。

調査対象とした流派は、藪内流、上田宗箇流、遠州流（遠州茶道宗家）、宗和流（加賀）、鎮信流、肥後古流、宗徧流（山田家）、江戸千家流、表千家流、裏千家流、武者小路千家流、松尾流、大日本茶道学会の 13 流派であり、これらにくわえて、分析の便宜上設定した「石州流多数派」である（以下、序章においては（ ）書きをのぞいた流派名を用いる）。「石州流多数派」とは、資料 1 の 6 においてくわしく説明するが、ある本に示されている石州系 32 流派の点前の連続写真からデータを得て、各項目における最多種類のあつまりを 1 つの流派と仮定したものである。

風炉薄茶運び点前を調査対象とした理由は、もっとも基本的な点前であり、教本が多く、調査しやすいためである。点前の情報は、教本がある場合にはそれにもとづいた。教本がない場合には信頼できる教授者に許しを得て、薄茶点前をビデオテープに撮影し、くりかえし検討して確認した。なじみのうすい流派の点前は、教本のみで細部まで理解できるものではない。大寄せ茶会の場合など点前を実見できる機会をみつけて、教本の内容を確認した。この作業の最終的な全体像は第 4 章においてくわしくのべることとし、ここでは 1 項目をとりあげて具体的に説明する。

点前をはじめるときには、茶碗に茶巾と茶筌とを入れ、茶杓を茶碗の縁にかけて準備をする。これを「茶碗の仕込み（仕組み）」という。茶筌および茶杓の向きに着目すれば、各流派には、おもにつぎの 3 とおりがみられる。

- ①茶筌の穂先上向き・茶杓下向き（うつむき）………Ud
- ②茶筌の穂先下向き・茶杓上向き（あおむき）………Du
- ③茶筌の穂先下向き・茶杓下向き（うつむき）………Dd

大文字は茶筌の穂先の上向き（U）・下向き（D）、小文字は茶杓の上向き（あおむき）（u）・下向き（うつむき）（d）の意味である。Ud を A 類型、Du を B 類型、Dd を C 類型とする（写真 0-1 参照。ただし、茶巾は省略した）。

流派により複数の仕込み方がある場合は、原則的な方法を私の責任において判断した。試論の段階では、原則および例外の両方を順に記した。すなわち、藪内流 CA、上田宗箇流 C、遠州流 B、宗和流 A、鎮信流 A、肥後古流 AB、宗徧流 AC、江戸千家流 C、表千家流 C、裏千家流 C、武者小路千家流 C、松尾流 C、大日本茶道学会 AC である。なお、本書の議論においては、原則的な方法のみを選択することにあらためた。

同様に、他の項目についてもアルファベットによる類型化をおこなう。それらをならべるならば、各流派の点前はアルファベットの記号列として表現されることとなる。そこで 2 つの流派のアルファベットの記号列を比較して、相互の一致不一致を調べ、一致している項目の占める率を算出した。これを試論では「一致率」とよぶこととした。



A 類型 (Ud)

B 類型 (Du)

C 類型 (Dd)

写真 0-1 茶碗の仕込み方の類型

表 0-1 13 流派における点前の一一致率

流派名		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
		藪内流	上田宗箇流	遠州流	宗和流	鎮信流	肥後古流	宗徧流	江戸千家流	表千家流	裏千家流	武者小路千家流	松尾流	大日本茶道学会
1	藪内流	△	0.59	0.34	0.53	0.53	0.38	0.44	0.50	0.50	0.56	0.50	0.50	0.50
2	上田宗箇流	0.59	△	0.38	0.63	0.50	0.44	0.53	0.44	0.56	0.53	0.53	0.56	0.59
3	遠州流	0.34	0.38	△	0.37	0.41	0.41	0.34	0.16	0.19	0.09	0.31	0.22	0.19
4	宗和流	0.53	0.63	0.37	△	0.43	0.43	0.40	0.37	0.50	0.47	0.47	0.50	0.60
5	鎮信流	0.53	0.50	0.41	0.43	△	0.63	0.53	0.34	0.38	0.31	0.53	0.47	0.38
6	肥後古流	0.38	0.44	0.41	0.43	0.63	△	0.56	0.34	0.38	0.31	0.41	0.44	0.31
7	宗徧流	0.44	0.53	0.34	0.40	0.53	0.56	△	0.63	0.66	0.53	0.66	0.72	0.59
8	江戸千家流	0.50	0.44	0.16	0.37	0.34	0.34	0.63	△	0.75	0.84	0.75	0.69	0.72
9	表千家流	0.50	0.56	0.19	0.50	0.38	0.38	0.66	0.75	△	0.84	0.81	0.88	0.84
10	裏千家流	0.56	0.53	0.09	0.47	0.31	0.31	0.53	0.84	0.84	△	0.72	0.78	0.88
11	武者小路千家流	0.50	0.53	0.31	0.47	0.53	0.41	0.66	0.75	0.81	0.72	△	0.91	0.72
12	松尾流	0.50	0.56	0.22	0.50	0.47	0.44	0.72	0.69	0.88	0.78	0.91	△	0.78
13	大日本茶道学会	0.50	0.59	0.19	0.60	0.38	0.31	0.59	0.72	0.84	0.88	0.72	0.78	△
参考	(石州流多数派)	0.45	0.58	0.42	0.41	0.87	0.58	0.45	0.32	0.35	0.32	0.48	0.42	0.39

この結果は表 0-1 のとおりである。この数字は、流派による点前の類似・相違の程度を客観的に示すものである。百分率にして説明するならば、もっとも一致率が高いのは武者小路千家流と松尾流との間であり、91% が一致している。逆にもっとも一致率が低いのは遠州流と裏千家流との間であり、9% しか一致していない。ちなみに表千家流と裏千家流との間では、84% が一致している。これにより点前を客観的に比較することが可能となる。

さらに表 0-1 の結果から、13 流派は 4 つのグループに分類できると考えた。まず、「武家系流派」と「千家系流派」とに大別する。前者はさらに藪内流、上田宗箇流、

宗和流のグループと、遠州流、鎮信流、肥後古流のグループとにわけられる。後者は宗偏流、武者小路千家流、松尾流のグループと、江戸千家流、表千家流、裏千家流、大日本茶道学会のグループとにわけられる。

(2) 試論の限界と新たな展開

平成9年(1997)に口頭発表をしたのち、すぐに試論の第1稿をまとめて学会誌に投稿した。しかし、その原稿がそのまま活字になることはなかった。その後、茶書にみられる点前の事例を注記に入れるなどして書き直し、再度投稿したものが平成13年(2001)3月刊行の『茶の湯文化学』第8号に掲載された。私は、一応の満足を感じながら、なしうる仕事をおえたように考えていた。千利休の点前を復元できないかという思いは、肥後古流の点前を調査した時点で挫折していた。想定していた仮説と大きく異なっていたからである。一方、点前を項目にわけて比較検討する方法は有効であると感じた。茶書の事例を整理する際にも項目に分割したことが役立った。流派数をふやして調査していくならば、さらに明らかになることもあるだろう。ただし、ここまですべて手計算で処理してきた私には、流派数をふやした場合にデータをどのように処理すればよいかわからなかったのである。また、歴史学系の研究者が多い茶の湯研究の分野では、文献資料にもとづいて議論するのが主流である。私の点前の研究に対して、面白さがあるにしても分析方法がないという批判や、茶の湯を学ぶものには迷惑であるという非難をうけたこともあった。

もはや研究を深めることをあきらめかけていたとき、1つのおどろくべきグラフ(図0-1)が知人を介して送られてきた。平成15年(2003)1月のことである。多変量解析を用いることにより、試論の内容はこの1つのグラフにまとめられるというのである。

このグラフを作成されたのは、同志社大学文化情報学部教授(当時は埼玉大学理学部教授)の矢野環先生である。グラフ上には13流派および石州流多数派の合計14流派の点前が示されている。

矢野先生は、グラフ上に遠州流をのぞく13流派を示す点が1つの曲線を構成してならんでいることは、試論において作成したデータが適切であることを意味していると評価された。ただし、問題は遠州流の位置である。13流派がならぶ曲線から1つだけ大きくはなれていることは、遠州流の点前が13流派と比較してきわめて特異であることを示していることとなる。

矢野先生がどのようにしてグラフを作成されたのかはともかく、このグラフの意味を、私はつぎのように理解した。ある曲線上に流派の点がある方向性にもとづいて変化していることを示している。しかし、遠州流だけが極端にはなれていることは、その方向性からはなれた、一種不自然な変化と判断されるおそれがある。

検討段階において私も遠州流が特異であるという印象をうけたことはたしかである。鎮

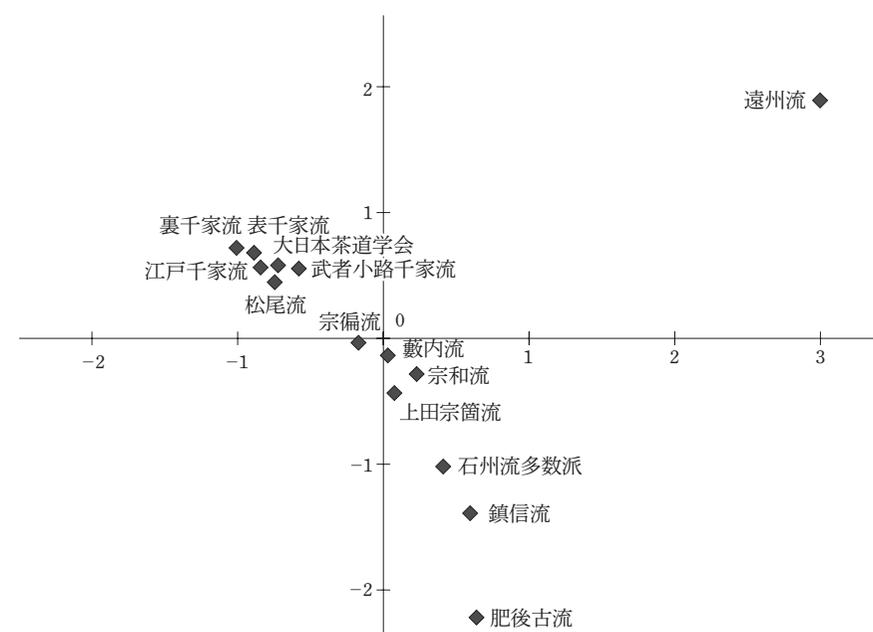


図0-1 13流派の点前の比較(矢野先生作成。ただし、流派名は変更した。)

信流の視点からしても、千家流の視点からしても、遠州流の点前には特異な部分が多くみられる。しかし、遠州流の点前には、独自の感性があり、他の流派とは異なる変化の方向性があったとしても不自然ではないと感じた。もしも遠州流以外の遠州系流派のデータを組み入れるならば、13流派の曲線と遠州流との中間あたりに位置し、遠州流の変化の方向性が示されるのではないかと推測した。手元にあった調査済みの小堀遠州流および玉川遠州流の点前のデータを矢野先生にわたして分析を依頼したところ、予想したとおりの結果となった。

このとき、私がしてきたことの意味をあらためて認識した。茶の湯点前という質的データを数値データにつくりかえる作業である。数値データを統計処理するといえば、わかりやすい話である。質的データであっても、数値化できるならば、このような分析が可能となるのである。私にできる最善の仕事は、よりよい点前の数値データを作成することである。このグラフにふれたことを契機として、点前の研究は、新たな段階にすすむこととなる。多くのデータをまとめて分析することができるので、流派数をさらにふやすこととし、最終的に44流派の点前を調査した。本書は、このデータを公表するとともに、数値データを用いた分析の可能性の一端を示すものである。このデータは私が茶の湯の実技において積みかさねた経験とそれを抽象化する努力から、はじめて数値化することができたものである。分析方法を工夫するならば、このデータからさらなる知見を得ることができよう。

私は、この研究を完成させるため、平成19年(2007)に神戸大学大学院国際文化学研

入り細に入り、さまざまな定めがある。そして茶の湯であるかぎり、点茶する側および喫茶する側の双方は、その定めにしたがうことを要求される。以上のような作法体系全体を“点前作法”として“広義の点前”と考えることができる。従来から点前の研究については、この広義において論じられる傾向にある。

しかし、一般に点前とは、炭のつぎ方の手順・所作を別として、茶の点て方の一連の手順・所作をさしている。濃茶の場合と薄茶の場合の間には点前のちがいがあり、さらに使用する道具や茶を点てる場所により、点前には数多くの種類がある。“茶の湯”を学んでいるという場合、それは“点前”を学んでいることを意味している。本書では、この“狭義の点前”の意味において“点前”という言葉を用いることとする。

「茶室・茶道具・点前の三要素が揃うことにより、はじめて茶の湯といえる」（谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』47頁）と茶の湯を規定する考え方がある。これは正鵠を得ている。ただし、茶の湯の成立期ならばともかく、茶の湯が広く認知されている現在、3要素が十全でなくとも人は“茶の湯”と認識できるだろう。何がもっとも茶の湯を感じさせるかというならば、その本質的な要素は点前にあると考える。茶の湯研究の面からみるならば、茶室の特徴や茶会記にあらわれる茶道具などと、茶匠や流派との関係について、多くの研究成果が積みかさねられている。それらと比較してもっとも遅れているのが、点前についての研究である。

(2) 点前のちがいについての考え方

点前とは“客を前にして、主人が茶を点て、客がそれを飲む”という目的のために構成された一連の手順・所作である。しかし、この手順・所作は1とおりにかぎられるものではなく、ある程度異なる手順・所作が可能である。このために流派による点前のちがいが生じることとなる。

茶の湯についての考え方を茶の湯観とよぶとのべた。それは流派により微妙に異なるものであろう。茶の湯観とは、おそらく茶の湯についての善悪美醜などの感覚的問題、すなわち、美意識が核となるものと考えられる。点前におけるいくつかの可能性のうち、いずれを選択するのかは、茶の湯観により判断され、決定される。流派による茶の湯観のちがいは、点前のちがいとしてあらわされることとなる。茶の湯観は点前として表現され、茶の湯学習者は点前を稽古することにより茶の湯観を学んでいく。この茶の湯観と点前との関係は、つぎのとおり教えられていることからもうかがえる。

点前といへば、直接にはお茶をたててのむ為めではありますが、この外にもう一つの意味があります。それは点前を反覆練習する間に自らお茶の心を体得するのであります。（千宗左（即中齋）『即中茶記』第1分冊、6頁）

究科に入学した。この当初の思いとは異なり、学位論文「近現代における茶の湯家元の研究」を提出して修了することとなった。数値データをあつかうことよりも、文献資料という質的データをあつかうことの方が私には面白く思えたのである。といえは美しく聞こえるが、すでに馬齢をかさねた私に、新たな学問を習得することは無理というものであった。ただし、本書には大学院在学中の努力の跡も反映されている。第2章は、大学院博士課程後期課程において、^{KANGMin}康敏教授（情報コミュニケーションコース）の指導のもとに実習課題としてとり組んだ成果である。

このことをはじめ、本書における分析は、他の研究者の力を借りなければ完成にはいたらなかった。本来であればみずから分析技術を習得して、納得のいく結論を出すべきである。しかし、かぎられた人生の時間を考えたとき、この段階にとどまらざるを得なかったのである。この点について批判は甘受しなければならないし、忸怩たる思いでもある。

3 流派による点前のちがいと変化

(1) 茶の湯における点前の意義

日本の喫茶法の歴史には、中国における主たる喫茶法の変遷に対応した3種類の方法がみられる。中国唐代におこなわれた、固形茶を粉末にして煮出して飲むという「団茶法」の伝来が日本における喫茶のはじまりであろう。ついで、中国宋代におこなわれた、茶葉を粉末にして湯をくわえて攪拌して飲むという「碾茶法」が伝えられた。さらに、現在の一般的な飲み方である、茶葉に湯をくわえて成分を抽出して飲む「淹茶法」が中国明代にはじまり、日本に伝来した。

中国における喫茶法に手順や作法が定められていたことは、当時の文献からもうかがえる。しかし、中国にはおそらく残っていない碾茶法は、日本において独自の発展をとげたのである。精緻に発展した碾茶法による喫茶を、茶室という専用空間において、鑑賞に値する器物を用いながら、点前という一定の手順・所作によりおこない、主客が共同して特殊な場を創出する行為が“茶の湯”であるといえるだろう。茶の湯とは、単なる喫茶法の問題にとどまらない。碾茶法を大幅に改良し、それに他の要素を付加したからこそ、日本において碾茶法が現在に伝わるのである。

茶の湯というと一般に思い起こされるのは、儀式化された主客の一連の“作法”であろう。たとえば正式の茶会においては、茶室において懐石という食事をとり、濃茶を飲み、薄茶を飲み、その間に炭をつぎ足すという、おもに4つのことがおこなわれる。そのはじめからおわりまでの間、歩き方にはじまり、お辞儀の仕方、箸や食器のあつかいなどの食事の仕方、菓子の食べ方、濃茶および薄茶の点て方と飲み方、道具の鑑賞方法など、微に

う。第一の考え方は、流祖の点前を変化なくうけついでいるとするものである。千利休の嫡流にあたる表千家流の当代家元は、つぎのとおりのべている。

点前の形は昔から変わっていませんし、また、変わってはならないものです。(表千家流教本 10 頁)

表千家流の先代家元は、さまざまな茶の湯の系統がすべて千利休にさかのぼるとした上で、千家流の流れが主流であり、それ以外に 2 つの傍系として、千利休の弟子または孫弟子などが開いた流派の系統、および千利休の長男千道安の系統があると説明している。そして、点前の変化について、つぎのとおりのべている。

傍系の系統は多く諸大名に依つて一流が名乗られて居ります。武家でありますと、佗び茶はふさはしくありません。大名茶とか、御殿のお茶とか、「きれいさび」とか申す処に色々の特色があり、お茶をたてる点前も自然はでな所作を加味してまいります。

これに反して私共の点前は外の流義に比して、最も簡素であり、最も自然な所作に終始するといふ点に特色があります。所作はすべて必要以外の殊更めいた動作を致しません。極く自然に動作をすることが必要であります。真に冗を省き、要のみを拾つたという感じが致します。

これは一つには利休直系のものを伝へたという点にも由来して居ります(千宗左(即中齋)『即中茶記』第 1 分冊、15～16 頁。下線引用者)

ここにみられるのは、表千家流の教えが流祖千利休以来変わらぬものであり、他の流派が「所作を加味して」点前を変化させたという理解である。“大名茶”の代表的なものとしては遠州系や石州系の流派があげられるだろう。これらに対し、表千家流は千利休直伝の教えを守りつづけていると認識しているのである。

一方、変化を認める考え方もある。武者小路千家流の当代家元は、つぎのとおりのべている。

茶の湯の世界においても、時代の趨勢とともに、その流れにいくぶんの変化が伴うことは、その歴史に証明されています。

たとえば、各種の点前のうちでも、歴代家元により各種各様の変化がつけられたり、さらには、はっきりと「何々齋形」という名称がついている点前すら存在しています。

点前は、けっして一つのきまった形を墨守しつづけたわけではないのです。むしろそのような種々の変化のある各点前に、また千家流茶道の力強さすら感じる思いがし

しかしながら、どの流派においても茶の湯の目的に大きなちがいはあるわけではなく、流派による点前のちがいは客観的にささやかなものとみえるだろう。ある茶の湯の家元は、点前のちがいについて、つぎのとおりのべている。

ではどこが違っているのか、はっきりいえば、どうでもいいような部分、つまり、多少変化をつけたとしても、点前そのものの意味にはなんら支障のない部分に、流派によって少しずつ違いが見られるにすぎないのです。(千宗左(而妙齋)『茶の湯随想』52～53 頁。下線引用者)

点前のちがいには大した意味がないといわんばかりである。しかし、この考えによるならば、点前のちがう流派が存在する意味がわからなくなってしまう。茶の湯観という流派としての考え方があるからこそ点前にちがいがあると積極的な意義をみいだしたい。

一般的に茶道なるものを考えれば、流派という点では多数に分れる。しかしながら、その目的とする所はただ一つであって、それら各流派の間には何らの差異もない。「ただ湯をわかして飲むばかり」である筈である。それならばこのように多くの流派が生まれる道理はない。しかし、現実には多くの流派が存在する。それぞれの流派は、点前(主として点前の内でも道具扱い)に差異があるだけである。すなわち、各流祖の個人的見解の差によって生まれると考えられる。点前を構成する一つ一つの行為の意味づけの相違が、この多くの流派を生む根本であろうと考えられる。(松浦祥月「鎮信流茶道」『日本の茶家』459 頁。下線引用者)

現実に点前のちがいをみるならば、この理解の方が説得的であるといえる。ただし、すべてを流祖ひとりに帰することには疑問がある。もちろん流祖の茶の湯観はもっとも重要であり、その影響も大きい。しかし、流派を伝えた代々の人々の茶の湯観により総合的に形成されたもの、それが現在おこなわれている流派の点前であると考えられる。

念のために申し添えておくが、本書においては点前にちがいがあることを指摘する。しかし、いずれが正しいとかあやまりであるとかを論じているわけではない。茶の湯の稽古において、よく“合理的な点前”という教え方がされる。各流派とも、それぞれの茶の湯観、すなわち“理”にもとづいた点前なのである。“理”が異なれば、それに“合”う点前もおのずと異なる。流派により“合理的な点前”が異なることは、当然のことである。

(3) 点前の変化についての考え方

流派間において点前に多様性がみられることから、点前が変化してきたことは認めざるを得ない。この“点前の変化”という問題について、流派により 2 つの考え方があるだろ

第4章では、44流派の点前のちがいを項目ごとにくわしく説明し、くわえておおむね近世初期から近世中期にかけての茶書の事例を紹介する。過去の茶書の事例は、ある時代における点前の状況を示す証拠となるものである。ただし、資料として用いるためには茶書の批判的検討が十分ではない。まずは点前の項目ごとにも茶書の事例を列記することにとどめる。

第5章では、茶書の事例を用いて、点前が変化した方向性と時期とについて検討する。流派による点前のちがいについて論じている『茶譜』および『茶道望月集』にもとづき、点前の4項目をとりあげて分析と考察とをおこなう。

終章では、以上の議論を総括し、点前の変化についての新たな考え方を提示する。

資料編として、まず調査対象とした44流派の系譜を紹介する。そして点前の調査方法、類型化における判断、参考文献等を示す。

点前を研究対象とすることがむづかしい理由として、点前には形態的なちがいがみられるものの、そのちがいを適切に把握できないことがある。たとえ把握できたとして、その意味するところがわからないこともある。これらのちがいは、感覚的なものである茶の湯観に由来し、言語化されにくいのである。点前のちがいを客観的に評価すること、それにより流派間における点前の多様性を示すこと、これが点前を研究する第一歩であると考えられる。

なお、点前における形態的なちがいは、他流派との比較をふまえて、私の責任において判断したものである。それぞれの流派が認識しているところとは、かならずしも一致しないであろうことをあらかじめおことわりしておく。

ます。(武者小路千家流教本17頁。下線引用者)

また、裏千家流では、幕末・明治初期の家元千宗室(玄々斎)(文化7年(1810)～明治10年(1877))の時代に点前・作法が改変されたものと理解されている。裏千家流の高弟は、つぎのとおり述べている。

よく裏千家の現行の作法は、何時時代に確立された手法かと質されることがあるが、[略]あらゆる面から総合して考察するのに、まず玄々斎時代に確立されたと思われる。(浜本宗俊『茶人随想—利休とその道統—』156頁)

こうした変化を容認する考え方の背景には、千家流においてそれぞれ点前が微妙に異なるという現実的な問題がある。「いくぶんの変化」を認めつつも、その前提として、千利休以来の教えの枠内での変化とみなしているのであろう。

千家流以外では、点前の変化についてどのように考えているのか、具体的に指摘することはむづかしい。しかし、流祖が創意工夫によりすぐれた点前を考案し、それを現在まで守り伝えているというのが各流派の認識であると考えられる。こうした認識の背景にあるのは、点前の創意工夫を流祖に帰する考え方であろう。裏千家流が点前の変化を特定の家元の功績に帰しているのも、流祖に準ずる存在と認識しているためであると考えられる。

4 本書の構成

本論にはいる前に、本書の構成をおおまかにのべておく。

第1章では、44流派を系統ごとに分類する。そして一連の手順・所作からなる点前を分割し、項目ごとに類型化する方法の概略をのべる。これにより44流派の点前を数値データにすることが可能となり、流派間における点前の多様性を表やグラフにより示すことができることとなる。

第2章および第3章では、44流派の点前のデータを用いて数理的分析をこころみる。第2章は多変量解析による分析であり、現在における点前の多様性をグラフにして検討する。第3章は文化系統学的な分析であり、系統推定により流派が分岐してきた過程を示す系統樹という図形をえがき検討する。

以上の分析方法により、流派間における点前の多様性を示すとともに、その状況にいたる変化を推測することができる。ただし、技術的な限界があるので、別のアプローチをこころみることにする。

Sample



廣田吉崇

(ひろた よしたか)

昭和34年(1959) 生まれ。

昭和60年(1985) 東京大学法学部卒。

平成7年(1995) 阪神・淡路大震災を契機に茶の湯研究をはじめ。

平成24年(2012) 神戸大学大学院国際文化学研究科文化相関専攻博士課程修了。博士(学術)。

著書に『近現代における茶の湯家元の研究』(慧文社、2012年)、訳書に『MTMJ: 日本らしさと茶道』(クリステン・スーラック 著、廣田吉崇 監訳、井上 治・黒河星子 翻訳、さいはて社、2018年)がある。

Sample

お点前の研究

茶の湯44流派の比較と分析

2015年3月30日 初版発行

2020年6月8日 オンデマンド版発行

著者：廣田吉崇

発行者：大隅直人

発行所：さいはて社

Website <http://saihatesha.com/>

E-mail info@saihatesha.com

編集：田中奈保生

校正：上念 薫、坂井康史

オンデマンド版作成：田中 聡 (TS スタジオ)

装幀：加藤恒彦

Copyright © 2015 by HIROTA Yoshitaka

Printed in Japan

本書を許可なく複製することは、かたくおこわりします。



Dies ist ein WWF-Dokument und kann nicht ausgedruckt werden!

Das WWF-Format ist ein PDF, das man nicht ausdrucken kann. So einfach können unnötige Ausdrücke von Dokumenten vermieden, die Umwelt entlastet und Bäume gerettet werden. Mit Ihrer Hilfe. Bestimmen Sie selbst, was nicht ausgedruckt werden soll, und speichern Sie es im WWF-Format. saveaswwf.com

This is a WWF document and cannot be printed!

The WWF format is a PDF that cannot be printed. It's a simple way to avoid unnecessary printing. So here's your chance to save trees and help the environment. Decide for yourself which documents don't need printing – and save them as WWF. saveaswwf.com

Este documento es un WWF y no se puede imprimir.

Un archivo WWF es un PDF que no se puede imprimir. De esta sencilla manera, se evita la impresión innecesaria de documentos, lo que beneficia al medio ambiente. Salvar árboles está en tus manos. Decide por ti mismo qué documentos no precisan ser impresos y guárdalos en formato WWF. saveaswwf.com

Ceci est un document WWF qui ne peut pas être imprimé!

Le format WWF est un PDF non imprimable. L'idée est de prévenir très simplement le gâchis de papier afin de préserver l'environnement et de sauver des arbres. Grâce à votre aide. Définissez vous-même ce qui n'a pas besoin d'être imprimé et sauvegardez ces documents au format WWF. saveaswwf.com



SAVE AS WWF, SAVE A TREE